国宝 瑞龍寺薪能

第三十八回 高岡薪能

◆とき 令和四年 八月二十八日(日)
第一部●午後一時始 薪能●午後五時四十五分始

◆ところ 国宝 高岡山 瑞龍寺境内
(雨天の場合・富山県高岡文化ホール)

◆舞囃子
鞍馬天狗 金森 秀祥

◆狂言
茶壺 能村 晶人 炭 光太郎 能村 祐丞

◆仕舞
養老 佐野 由於
玉之段 金井 雄資

◆能
半蔀
シテ 大坪喜美雄
ワキ 平木 豊男

【主催】高岡能楽会
共催／高岡市 高岡市教育委員会 北日本新聞社 富山テレビ放送株式会社
後援／富山県 国宝瑞龍寺保存会 砺波市教育委員会 南砺市教育委員会 氷見市教育委員会 射水市教育委員会 小矢部市教育委員会

芸術文化振興基金助成事業

写真提供：宝生会写真部

演目紹介

能

半蔀（はしとみ）

夕闇に咲く、ほのかな白い花のはかなさを思わせる女

典拠　源氏物語
場所　京・雲林院、五条
前ジテ　里の女
後ジテ　夕顔の女の霊
ワキ　雲林院の僧
アイ　所の者

一夏の安居の修行も終わり、草花を集めて立夏供養を行っている僧のもとに、若い女が来て夕顔の花を捧げ、昔五条のあたりに住んでいたと言い残して消える。女の言葉に従って僧が五条あたりに来てみると、半蔀戸を下ろした家から夕顔の女の霊が現れる。夕顔の女の霊は、光源氏に夕顔の花を折って白い扇にのせて差し出したことが縁となって、光源氏と深い契りが結ばれたときのことを物語ると、思いをこめて優美に舞を舞い、やがて半蔀戸の奥に消え去る。

▼鑑賞

前場は短く、初秋の夕暮れの雰囲気を味わせてくれる。特殊演出で舞台に立花を置く場合もあるが、草花の中にふっと登場するシテの姿に息をのむ思いがする。

後場では半蔀屋という作り物を出す。蔀戸の上部を押し上げて現れたシテの姿の美しさによって、『源氏物語』の文章をたくみに折り込んだ謡にのせて舞うクセから〈序ノ舞〉へと情緒が高揚していく。〈序ノ舞〉にかかるところで「折りてこそ」と和歌のはじめの言葉を用い、クセから〈序の舞〉への連続性を持たせている。「折りてこそ、それかとも見めたそかれに、ほのぼの見えし花の夕顔」と謡われる和歌は、典拠『源氏物語』の「寄りてこそ、それかともみめたそかれに、ほのぼの見つる花の夕顔」を改作しているが、舞台上で舞うシテの長い回想を通しての陶酔の舞には、かえって美しく効果的な改作といえよう。「花の夕顔、花の夕顔、花の夕顔」というリフレインも、しみじみとした味わいを持ち、〈序ノ舞〉の余韻を反芻するようだ。

（能楽鑑賞百一番　金子直樹）

狂言

茶壺（ちゃつぼ）

シテ　すっぱ
アド　使いの者
アド　目代

酒に酔った使いの者が道端に寝こんでいると、すっぱ（心の直ぐない者、詐欺師）がやってきて茶壺の連尺（茶壺の紐）の片方に自分の腕を通した。そして目をさました使いの者と、茶壺が自分のものだと争う。目代（代官）が仲裁にはいり、今までの子細を聞くと、すっぱは使いの者の返答を盗み聞いて同様に答える。次に入日記（入れ日記とも。発送商品に入れておく内容目録）を問うと、使いの者は道中の様子などを折りまぜて、謡い舞いながら説明する。それを見て、すっぱも真似して謡い舞うので、どちらが本当の持ち主かわからず、そこで二人一緒に舞わせるが、埒が開かず、目代が茶壺を奪って逃げてしまう。

（狂言鑑賞二百一番　金子直樹）